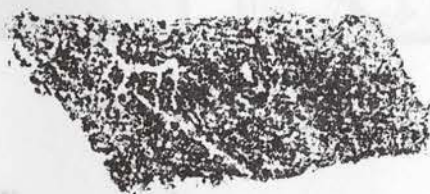


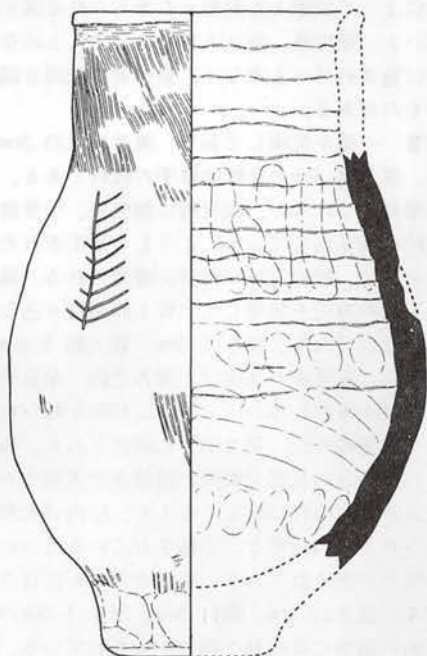
82. 服部遺跡出土の 線刻ある木製品について

1

弥生土器の一局部に、篋描き・櫛描き・竹管押圧・浮文貼付け・彩色等の手法で絵画ないし記号風の表現を施す事例は、今や相当数に達しており、絵画は中期末葉を主体に中期中葉にさかのぼるものが知られ、記号風の表現は後期を主体に中期前葉にまでさかのぼる類例が知られるようである(注①)。服部遺跡でも、既に紹介されたことのある手焙形土器に施した幾何学文様例(注②)の他、新たに中期末葉の住居址内から出土した壺片に付された簡易な四足獣(鹿か?)をえがいた絵画例(第1図)を始め、後期前半の溝出土の壺に篋描きないし竹管押圧の記号風表現を施した4例(第2図など)を確認している。今後、整理作業の進展にともなって類例はさらに増加するものと期待されるが、一方、同遺跡で出土した木製品の中にこうした表現に類した線刻を施すものを発見している。木製品についての類例は余り知られていないので、本論ではそうした木製品を中心に紹介することにした。以下、紹介する4例の木製品は、いずれも弥生時代後期後半を主体とする旧河道から出土したものである。



第1図(縮尺1/1)



第2図

2

PW1 一部欠損がみられるが、現存長61.4cm、現存幅12.0cm、厚さ 1.2cmを計る。用途は不明だが、柾目板に木取りし、全体に作りが丁寧である。長辺の遺存する側には、2箇所(2ないし3穴を単位とする小孔が穿たれ、一部他材との結合を意図した桜の樹皮が遺存していた。短辺の一端には、後述する線刻絵画があり、その長辺側の端部を削り込んで丸く仕上げ、又、上方には三角の切り込みがみられる。線刻絵画は、刀子様工具の刃先で切り込むようにえがいており、一線で表された大地上を四足獣が右上方へ跳び上がるような躍動感を描写している。四足獣の背面一帯には、斜め左右に走る直線及び孤線が多条に加えられているが、何を表現したものか判別し難い。

PW2 一木を入念に削り込んで作った四脚付皿である。皿部は、口径24.2cm、底径19.7cm、深さ 2.8cm

余の比較的浅いものである。底部内面には、加工痕ないし使用痕と考えられる直線的な線刻が顕著である。外湾する立ち上がり部の内外には、横に走る削痕が認められ、回転運動を利用した切削用鉄製工具の使用が考えられる。脚部は、高さ 4.0cm 余の四脚よりなり、等形の五角柱状に削り出している。この四脚の付される底部外面は、その中心より各脚に向かう V 字の深く鋭利な線刻によって四分され、うち一角内には、同様の線刻によって絵画とも記号とも考えられる図が表現されている。使用時、余り人目に触れることのない底部外面に施されている点など、製作者の意図を読みとり難いものがある。

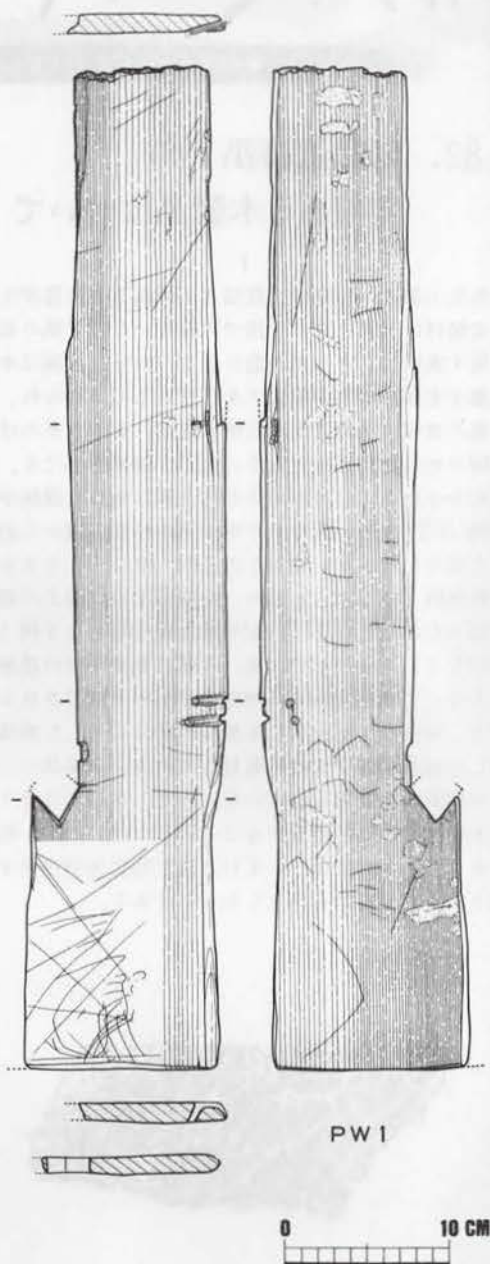
PW3 一端を欠損しており、現存長 133.2cm、幅 15.0cm、厚さ 4.6cm の比較的厚手の板材である。表面は若干摩耗しているが、板目板に割裂後、手斧様工具で連続的に削り出している。こうして加工された板材のほぼ中位に、綾杉文風の線刻が確認される。線刻は刃子様工具の刃先を使用して PW1 同様切り込むタッチで表現されており、長さ 7.5cm、最大幅 3.4cm を計る。こうした記号風の表現は、唐古遺跡（奈良県）や池上遺跡（大阪府）等の出土土器に類例が知られ、服部遺跡でも先述の壺（第 2 図）に確認された。服部遺跡のそれは、壺の肩部 2 箇所に篋描きで表現されている。なお、やや時代は新しくなるが、庄内式大和型甕に散見される“羽状叩き”と称されているものの原体が、本例と形態上似ており、系譜の存否が目玉される。

PW4 長さ 32.3cm、幅 11.5cm、厚さ 1.5cm の板材で、一面の過半には鋭利な線刻が施されている。線刻は、板材の長辺に平行又は斜行する多条の平行線を基調に、さらに X 印様の刻印がやや無作為とも思える風体で付け加えられている。

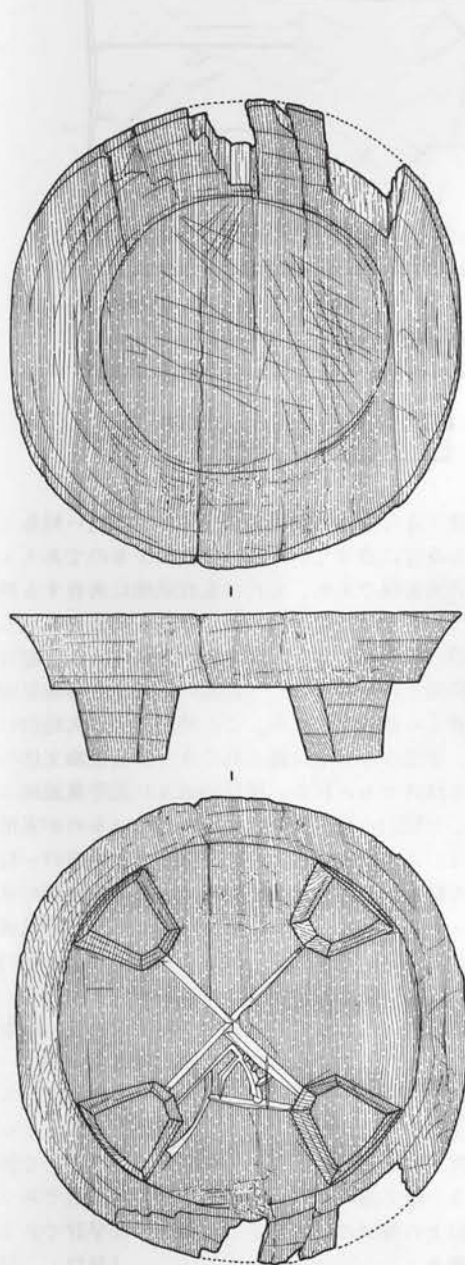
3

以上、服部遺跡出土の線刻文を施す木製品 4 例を紹介した。4 例中用途の明らかなものは PW2 の四脚付皿で、土器同様容器の機能を果すものである。他は欠損しているものもあって定かでない。又、施された線刻文は、PW1 が四足獣絵画、PW3 が綾杉文風の線刻であり、両者とも土器表現のうちに類例ないし類似点を見出すことができるのに対して、PW2 及び PW4 の線刻文は特異である。土器表現との相関関係が目玉されよう。

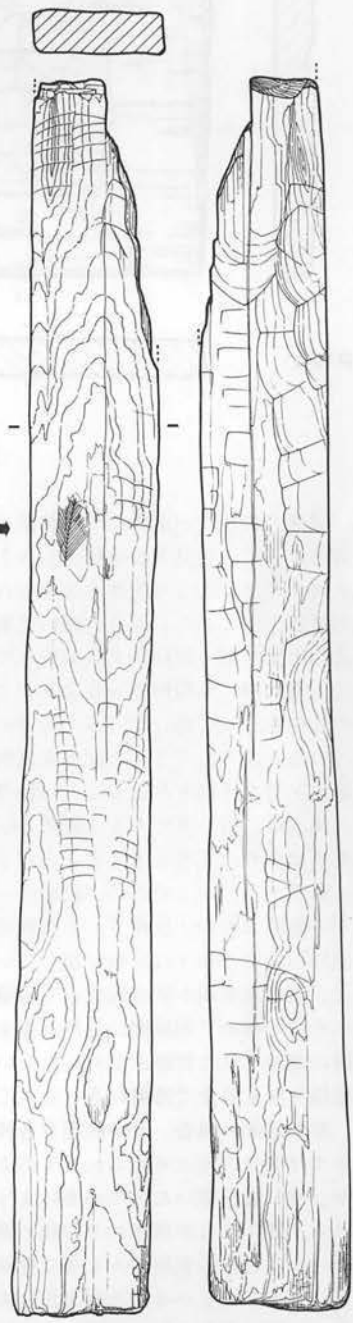
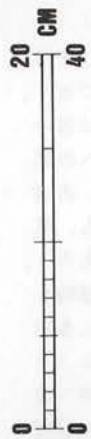
さて、それではここで土器を含む弥生時代中・後期のこうした原始絵画・記号風表現全般についてとらえ返してみよう。こうした表現のある土器を概観された佐原真氏は、記号風表現を原始絵画の抽象化とみ、原始絵画が記号風表現に比べてやや先行気味に共存する期間を経て、しだいに記号風表現が一般化する事実を指摘されている（注 1）。しかも、この記号風表現のな



第 3 図

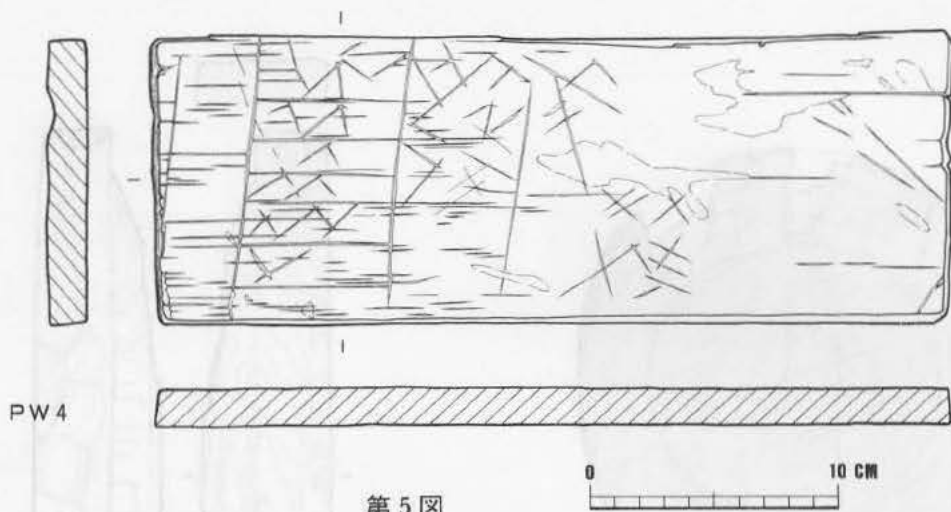


PW2



PW3

第4图



第5図

かには、同様の表現が一遺跡内で複数発見される場合、さらに遺跡をこえて発見される場合があることから、記号風表現に原文字的な可能性を推論されている。事実、服部遺跡で出土したPW3の綾杉文風の表現は、同遺跡溝内出土の壺の篋描き文に類似しており、唐古遺跡、池上遺跡等にも類例をみることができた。確かに何かの意味をもって働いているとも考えられようが、ただ、このことから、こうした記号風表現に対して相即的に原文字的な性格を与えることは性急であるように思う。文字は、言うまでもなく思考の伝達・記録のために生み出された記号と考えることができよう。しかし、土器そのものはこの当時、動産の一部として特例をのぞき私的に製作・使用された消耗の道具であり、伝達・記録の役割を担うには余り適しているとは言い難い。又、記号風表現が弥生時代から古墳時代への歴史の流れの中で極めて短期間に忽然と姿を消し、古墳時代以降に継承された形跡が認められない点でも、原文字の性格を与える上で理解に苦しむところであろう。

さて、原始絵画の場合、その画題は各種の動植物から建物まで架空の竜と考えられるものまで実に多彩であるが、特に鹿を描いたものが多いようである。そのことから、鹿とそれが描かれた貯蔵の機能を持つ壺を関連づけ、この種の表現がある壺に豊饒祈願の意図を与えようとする人もいる。土器製作にあたり、製作者の脳裏の一隅に豊饒を願う気持ちが常にぬぐい去り難く介在したことは十分考えられるし、又、当初からそうした意図で製作された特殊な壺も事実存在したかもしれない。だが、そのことの表徴を鹿の描かれた壺全般に言及するのは困難である。鹿を画題とした原始絵画例が多いのは、当時の人々が、鹿を、肉は食用に、

角・骨・皮は各種労働用具に供する価値高い対象として最も身近に感じていたことに起因するのであろう。

記号風表現であれ、それに先行気味に共存する期間を持つという原始絵画であれ、それらが表現されるのは土器の場合絶対多数が壺で占められている。壺は貯蔵の機能を持つものとして器面の平滑化と各種装飾文様が著しい器種であるが、この時期、壺は大局的にみると、平滑な器面上に施されてきた各種装飾文様の消失する傾向がみられる。原始絵画及び記号風表現は、そうした傾向の壺の極一部に施されているのが実情であろう。このことから考えると、無文化傾向の一般的なこの時期、壺の平滑面を利用してさらに加飾の意図をもって描かれたものが、原始絵画であり記号風表現と考えることができよう。両者とも、その第一義的な意図は装飾効果を期待することにあり、その行為として土器製作者の日常身近に接する物体の具象、抽象化が行なわれたのではないだろうか。無文化傾向の一般的な壺の平滑面を、あたかもキャンパスのごとくみだり自然景観を多彩に具象・抽象化して描くことで装飾効果を一段と高めようとする姿がむしろ自然であり、それ以上の推測は、少なくとも現状では早計であるように思う。(谷口 徹)

注1. 佐原真「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』第66巻第1号 1980

注2. 林博通「滋賀県における弥生式土器に施された絵画・記号的図形」『考古学雑誌』第67巻第1号 1981